

Title	複合動詞「～すぎる」について
Author(s)	山川, 太
Citation	日本語・日本文化. 26 P.29-P.47
Issue Date	2000-03
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8407">https://doi.org/10.18910/8407</a>
DOI	10.18910/8407
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究論文>

## 複合動詞「～すぎる」について

山川 太

### 1. はじめに

日本語には、ある種の動詞を動詞連用形に接合させて形成される複合動詞が多数存在し、大きく統語的複合動詞（添加的意味機能を有する）・語彙的複合動詞（変化的意味機能を有する）に分かたれる（影山（1993）、城田（1985, 1998））。これら様々な複合動詞に関しては、その意味的類別の記述が詳細に行われてきたが、体系化を重視するあまり、その記述が適切ではないと思われる形式が存在することも事実である。そこで、本稿では、そのような形式の一つとして「～すぎる」という複合動詞を取り上げ、考察を試みる。

本稿の内容は、大まかに以下のようなようになる。

- I 複合動詞「～すぎる」に関して、叙述機能の点から大きく二種に分類する。
- II I自体は、極言すれば、単なる taxonomy にすぎないものであるが、本稿では、この二種の「～すぎる」が各々違った構造に対応するということを示す。
- III IIにおける一対一の対応関係は絶対的なものではなく、何を基準に“過剰”の概念が生じているのかによって構造が異なっていることを主張する。

### 2. 「～すぎる」の形態論的側面

「～すぎる」が統語的複合動詞であり、統語部門 (syntax) で形成される複合動詞であることについては概ね意見の一致が見られている（影山（1993）、由本（1997）、城田（1985, 1998））。一方で、「すぎる」が如何なる動詞と結合し得るのかについては、影山（1993: 153）が「程度を表す限り、どのようなものでも整合する」と述べているが、これに対し、由本（1997: 105）では、前項動詞の表

す概念や事象に「程度」「段階性」を求めると、むしろ、どのような動詞も「すぎる」と結合可能であり、結合した結果、「段階性」や「尺度性」が帯びると考えられている。

- (1) a. 彼は知識があまりにも {\*ある／あり過ぎる} ので、嫌われるのだ  
 b. 彼はあまりにも {\*働いた／働き過ぎた}  
 c. 彼女はあまりにも部屋を {\*飾った／飾り過ぎた}

(由本 (1997: 105))

「あまりにも」という副詞は、段階性のある述語としかなじまないが、(1)を見て分かるように、「～すぎる」という形になってはじめて段階性が生じている。本稿では、由本 (1997) と同様、「すぎる」はどのような動詞とも結合し得ると考えておく。さらに、「すぎる」は、動詞に限らず、形容詞や形容動詞とも結合可能であり、この点、他の複合動詞と比べて特徴的である。

- (2) a. あの女優は美しすぎる      b. 彼女の口紅は赤すぎる  
 c. あの家は静かすぎる      d. 彼の性格は穏やかすぎる

このように、「～すぎる」は形態論的にも非常に生産性が高く、特に制限なく、あらゆる動詞、形容詞・形容動詞に「すぎる」が接合できる<sup>1)</sup>。

### 3. 「～すぎる」の解釈類型

ここでは、まず、本稿で用いる「解釈類型」という用語を明確にするため、城田 (1985) での「アスペクト・動作類型・姿・動作相」に関する各定義を確認しておく。ごく大まかに言うと、アスペクトとは、作用・状態を含めた広い意味でのうごきがどのようなすがた・かたちで行われるかということを表示する動詞の手段であると定義される。このような動詞の手段として、「各動詞の持つ語義が表すうごきの流れのすがた (つまり、外容ゼロ)」「テ形+いる／ある／しまう」「動詞連用形+後項動詞」が挙げられており、それぞれ「動作類型」「姿」「動作相」に対応する。このうち、動作相とは、「動詞連用形+後項動詞」の意味的類別をまとめて呼ぶ用語とされる。例えば、後項動詞「始める」は、「食べ始める」「書き始める」「眠り始める」等のような多くの複合動詞を形成し、これらの複合動詞は一つの動詞類別 (この場合、「段階相」という動作相中の「開始相」)へと

収斂する<sup>2)</sup>。

本稿での解釈類型とは、動作相とオーバーラップするものと考えられたい。

さて、本題の「～すぎる」に対しては、どのような解釈類型が与えられるのであろうか？ 城田 (1985) では、「～すぎる」に独立した動作相は与えられていないが、後の城田 (1998) では、動作相は“段階相”“状態相”“過剰相”に分けられ、「～すぎる」は、過剰相をなす過剰相動詞であると記述されている。“過剰”の意を加えるというのが、「～すぎる」に関する一般的理解であることは確かであろう。動作相の中に過剰相という独立した相を設定する必要性については、城田 (1985) で既に触れられているが、その理由の一つとして、「すぎる」が動詞に結合した場合でも、「すぎる」が加える意味は動詞の範囲を越える場合があることが挙げられている。実際、由本 (1997) 等でも指摘されるように、「すぎる」の意味添加 (作用域) は、前項動詞の意味のみに限らない。

(3) ベトナム戦争では人が死にすぎた

(4) 元気な子犬が生まれすぎた

(5) 彼は会場に早く到着しすぎた

(6) 彼は練習でうまく演技しすぎた

(3) では、「〈人が死ぬということ〉が過剰である」ということを意味し、結果、多くの人の死を表している。同じく、(4) では、「〈元気な子犬が生まれるということ〉が過剰である」ことになり、子犬の数の多さが表現されている。このような例では、命題内容が過剰に実現するということを示すが、(5)(6)における「～すぎる」は、副詞「早く」「うまく」の度合いが過剰であるという意味であり、「すぎる」の作用域が単なる前項動詞の意味のみにとどまらない。このように「すぎる」の作用域が、結合する動詞のタイプや共起する修飾語句とどのように関係するかについては、由本 (1997) において詳しく考察されているが、本稿で重視したいのは、(3)(4)(5)(6)のような「～すぎる」が叙述しているのは、あくまで命題であるということである。(3)(4)は〈ベトナム戦争で人が死ぬ〉〈元気な子犬が生まれる〉という命題について、(5)(6)は〈彼が会場に早く到着する〉〈彼が練習でうまく演技する〉という命題についてそれぞれ述べている。前述したように、「すぎる」は動詞だけではなく、形容詞・形

容動詞にも結合し得る。城田(1998)では、かかる形式に対しても過剰相(動詞)という資格が与えられ、「食べすぎる」や「美しすぎる」等を全て同一に扱っているが、本稿では、これに疑義を呈する<sup>3)</sup>。

- (7) 初心者は車を運転するとき注意深すぎる
- (8) あの喜劇役者は面白すぎる
- (9) そのスカートは彼女には派手すぎる
- (10) 先生の新しい著書は高価すぎて、とても買えない

このような例において、「～すぎる」が叙述しているのは、果たして命題だと言えるだろうか?本稿では、「形容詞・形容動詞+すぎる」は、あくまである個体に対する叙述であると考え。先に見た「動詞+すぎる」とは意味的にも異なった述語であることは確かであろう。

- (11) 毎年、元気な子犬が生まれすぎていることは喜ばしいことも言える
- (12) 最近、彼は飲みすぎているせいか、体調がすぐれないようだ
- (13) \*彼の部屋は最近きたなすぎている
- (14) \*この布団は老人には固すぎている

「すぎる」は、形態的にも動詞として認められるものであり、「～すぎる」もまた然りであるが、上の(11)から(14)の例で分かるように、「動詞+すぎる」は“ている”の後接が普通は可能であるが、「形容詞・形容動詞+すぎる」では不可能である。“ている”の後接を許さないということは、その動詞が状態性のものであり、さらに突き詰めれば、「形容詞・形容動詞+すぎる」は、形態は動詞であろうとも、意味的・機能的には前項の形容詞・形容動詞の特性をそのまま引き継いでいるというふうに考えられる(由本(1997)でも、「形容詞・形容動詞+すぎる」の場合は統語的には動詞になるが、概念構造のレベルではもとの形容詞・形容動詞の概念構造がそのまま生かされると考えられている)。(7)から(10)の「～すぎる」は、それぞれ「初心者」「あの喜劇役者」「そのスカート」「先生の新しい著書」という個体について述べたものであり、いささかミスリーディングな言い方をすれば、強意形容詞・強意形容動詞としての機能を有している。このように、「動詞+すぎる」と「形容詞・形容動詞+すぎる」の大きな違いは、命題に対する叙述か、個体に対する叙述か、ということになる。この意味



つの述語は、いくつかの点で異なった統語論的振る舞いを見せる。

- |                      |                |
|----------------------|----------------|
| (17) a. 太郎が広島へ行く     | b. 太郎は広島へ行く    |
| (18) a. *太郎がかしこい     | b. 太郎はかしこい     |
| (19) a. *太郎が馬鹿だ      | b. 太郎は馬鹿だ      |
| (20) a. *太郎が数学が良く出来る | b. 太郎は数学が良く出来る |

上の (17) から (20) における述語のうち、「行く」は局面レベル述語に、「かしこい」「馬鹿だ」「出来る」は個体レベル述語に属すると一般的に考えられるが、Arita (1997) でも述べられているように、主格標示を受けた名詞句は個体レベル述語とはなじまず、不適格になる。もちろん、これは、中立叙述解釈としては不適格であるということであり、総記解釈の場合には容認される (“叙述解釈” “総記解釈” の違いは、主格標示された名詞句に強勢を置くか否かによっても左右され得る (安藤 (1986) 参照) ので、総記解釈に関しては純粋な統語論以外の分析が必要かもしれない<sup>5)</sup>。

さらに、いわゆる「繰り上げ (raising) 現象」を分析した酒井 (1996) では、目的語への繰り上げ (raising-to-object) が可能なのは、補文述語が個体レベル述語の場合であるということを示している。

- (21) 花子は太郎が / \* を広島へ行くと思った  
 (22) 花子は太郎が / \* を論文を書くと思った  
 (23) 花子は太郎が / をかしこいと思った  
 (24) 花子は太郎が / を馬鹿だと思った  
 (25) 花子は太郎が / を数学が良く出来ると思った

このように、局面レベル述語と個体レベル述語は、意味的にも、統語論的にも全く違った述語であることが分かる。では、本稿での考察対象である「～すぎる」は、これら二種類の述語のどちらに分類されるのであろうか？前節で観察したように、「動詞+すぎる」は“ている”後接を許すが、「形容詞・形容動詞+すぎる」は“ている”後接を許さなかった。さらに、「形容詞・形容動詞+すぎる」は、形容詞・形容動詞の特性を引き継いでいると考えられた。このことから、「動詞+すぎる」は局面レベル述語であり、「形容詞・形容動詞+すぎる」は個体レベル述語であるという予測が立つが、(17) から (20)、(21) から (25) の現象

に「～すぎる」を当てはめると、ほぼ同様の結果が得られる。

- (26) a. 太郎が酒を飲みすぎた  
 b. 太郎は酒を飲みすぎた
- (27) a. 太郎が会場に早く到着しすぎた  
 b. 太郎は会場に早く到着しすぎた
- (28) a. \*太郎の部屋が静かすぎる  
 b. 太郎の部屋は静かすぎる
- (29) a. \*あの喜劇役者が面白すぎる  
 b. あの喜劇役者は面白すぎる
- (30) 花子は太郎が／\*を酒を飲みすぎると思った
- (31) 花子は太郎が／\*を会場に早く到着しすぎると思った
- (32) 花子は太郎の部屋が／を静かすぎると思った
- (33) 花子はあの喜劇役者が／を面白すぎると思った

ここまで見てきた限りでは、「～すぎる」は、その解釈類型に応じて局面レベル述語、個体レベル述語に分かたれることになるが、ことはそう単純ではないことが後で明らかにされる<sup>6)</sup>。

## 5. 二種類の述語の統語構造

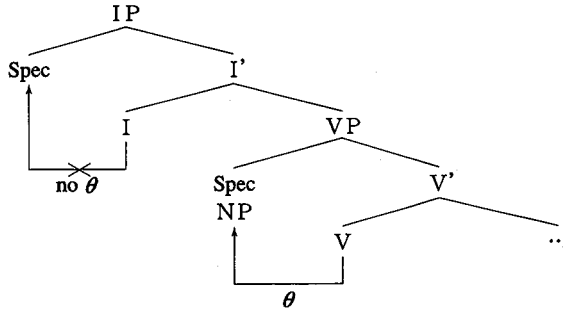
Diesing (1992) では、局面レベル述語と個体レベル述語の統語論的な違いは、これら述語が結合する屈折要素 INFL の違いから生じていると主張された。そして、かかる統語論的相違は、英語の複数裸名詞句主語 (bare plural subject) の解釈を説明する際に有用であるとされている。

- (34) a. Americans are sick.  
 b. Americans are tall.

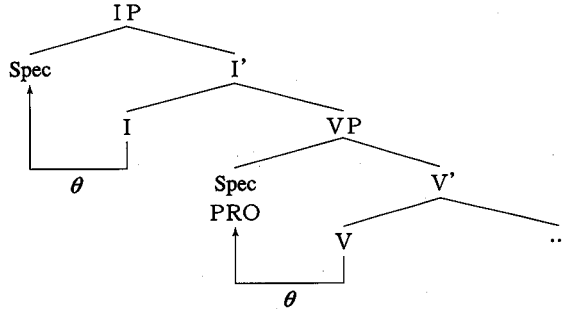
(34a) では、“Americans” は「総称 (generic)」の解釈と「存在 (existential)」の解釈を持ち得るが、(34b) の方は総称の読みしか許されない。このような違いに対して、Diesing (1992) は、“sick” “tall” という各々の述語が、局面レベル述語、個体レベル述語であると規定し、それぞれの述語を有する文に以下のような構造を与えた。



## (35) 局面レベル述語



## (36) 個体レベル述語



(35) の構造における INFL には、IP の指定部 (Spec) に  $\theta$  役割を付与する能力がなく、VP 内部に基底生成された主語 NP は、VP 内部で  $\theta$  役割を受け取り、格付与されるために IP 指定部へと上がっていく。総称の読みはこの位置で与えられ、存在の読みは、論理形式部門 (Logical Form) において、IP 指定部から VP 内部へと主語 NP が繰り下がる (lowering) ことで与えられる。このような構造は、IP 指定部の位置が非  $\theta$  位置であるという点では、従来の「繰り上げ構造」的構造である。一方、(36) の構造では、主語 NP は、VP の外部である IP 指定部に基底生成され、常にその位置にとどまっているので、総称の解釈のみが与えられることになる。この (36) の構造では、屈折要素 INFL に IP の指定部位置に対する  $\theta$  役割付与能力が想定されており、また、VP 内部に PRO が位置していることから「コントロール構造」的構造であると言える。この場合、INFL によ

て与えられる  $\theta$  役割は、述語 (VP) によって表される特性、つまり、概ね「属性…を有する」というような、いささか抽象的な意味であると考えられている。よって、(35) の構造と (36) の構造の大きな違いは、INFL の  $\theta$  役割付与能力の有無ということになる<sup>7)</sup>。

このような Diesing 流の考え方は、なるほど、英語の複数裸名詞句主語の解釈の曖昧性を説明するのには有効であると考えられるが、かかる議論を直接日本語に持ち込むことは適当ではないと思われる。まず第一に、述語の表す意味が一時性的か恒常的かによって局面レベル述語と個体レベル述語に二分すること自体が taxonomy としては絶対的なものではないことが挙げられる。英語では、よく知られているように、“kind” や (34b) の “tall” のような形容詞は、限定用法の場合には“恒久的な特徴”を表し、叙述用法として用いられると“一時的な特徴”を表すとされている。

- (37) a. Mary is a kind girl.  
b. Mary was very kind to me yesterday.

(安藤 (1985: 78))

- (38) a. The boy is tall/wise/handsome.  
b. He is a tall/wise/handsome boy.

(安井他 (1976: 97))

- (39) a. Who can reach the top of the shelf?  
b. Oh, John is tall enough (to reach it).  
c. Oh, John is a tall enough man.

(安井他 (1976: 98))

限定用法の (37a) では、メアリーの恒常的な性質が表されているが、叙述用法の (37b) では、メアリーが日頃親切だという含みはない。また、(38a) は叙述用法であるにも関わらず、一時的な特徴というよりも恒常的な性質が記述されていると言えるが、それでもやはり、主語の恒常的な性質より特定時の性質が問題になっているということが (39) によって傍証される。(39a) の質問に対する答えとして、(39c) は不適切とされるからである。よって、述語を区分する目安としては、“恒常的” “一時的” の二項対立よりも、“特定時において、主語の内在的

特性を示す” “特定時において、主語の時間的狀態を示す” のような意味的分類が適當ではないかと思われる。

(40) John is brave.

(41) John is brave only when he is with his friends.

(40) では、“brave” は John の内在的特性の一つを示していようが、(41) においては、John の時間的狀態が示されていると言え、同じ述語でも、(41) では個体レベル述語から局面レベル述語へとシフトされている。もちろん、(40) のような無標 (unmarked) の状況においては、“brave” は個体レベル述語として機能するが、かかる無標の状況下で述語がどちらのレベルの述語として働くかについては以下のような診断法 (diagnosis) も考えられよう。

(42) a. What sort of man is John?

b. He is tall/kind.

c. ???He is awake/drunk.

(42a) の返答として (42c) が不適格なのは、“awake” “drunk” という状態を内在的特性として有する人間は想定しがたいからである。このように、述語に関して、“恒常的” か “一時的” かを絶對的に決定するのが困難なことは日本語においても当てはまるものと考えられる。

(43) 太郎はA組では背が高いが、B組ではそうでもない

(44) 太郎は数学のクラスでは普通の中学生だが、科学のクラスだと天才だ  
“背が高い” “天才だ” は、通例、恒常的な性質を表すものと捉えられるが、(43) (44) においては一時的な性質として話題になっている。

Diesing 流の分析に対する第二の問題点としては、英語では (34a, b) のように述語の性格によって表層主語 NP の曖昧性 (「総称」か「存在」か) が顕在化するのに対して、日本語においては、三宅 (1995) でも述べられているように、「～ハ」が用いられることによって総称の解釈が強制的になるのが一般的であることが挙げられる。

(45) a. 彼は社長だ

b. 彼が社長だ

c. 卯は安い

## d. 卵が安い

(三宅 (1995: 72))

三宅 (1995) では、(45a) は「彼」に対する恒常的属性記述（「総称」の解釈に対応する）を表し、(45b) は「社長は誰かというそれは彼だ」という解釈であって、「彼」についての属性記述ではないとされている。また、同様に、(45c) は「卵」に関しての属性記述であるのに対し、(45d) の方は、店先での「あっ、卵が安い！」の発話のような特定の「卵」についての記述であるとされている。このように、「～ハ」によって「総称」の読みがなされ、また、Endo (1994) でも述べられているように「ガ」「ハ」の違いが主語 NP の統語論上の位置に還元されるものであると考えるなら、日本語では、二つの述語の区別、ひいてはそれぞれの述語について別個の構造を設定する必然性は希薄であるということになる。なぜなら、全ての述語が局面レベル述語であって、解釈の相違は LF の段階で顕在化すると捉えることが可能であるからである。しかしながら、上の (45b) における「彼が社長だ」は、叙述解釈よりも総記解釈として認識されやすいし、また、その述語の性格によっては、たとえ主語 NP が「ハ」によってマークされていても「総称」や「属性記述」の意味が与えられない場合も見うけられる。

(46) 卵は閉店間際だと安い (よ)

(47) あの人は機嫌のいい時だけ親切だ

(48) コーヒーは甘いものの後だと苦い

以上の例は、いずれも「総称」「属性記述」とはとりにくい。これは、“閉店間際だと” “機嫌のいい時だけ” “甘いものの後だと” のような副詞的要素に起因するものであると思われる。これらの要素を削除すると、上例は全て総称・属性記述になる。このように、日本語での総称・属性記述の解釈に関しては、「ハ」のみがその責任を負っているとは言えず、やはり、当該の述語がいかなるものなのか（局面レベルか個体レベルか）が関連しているものと考えられる。そして、その述語の性格決定には、共起する副詞的要素や話者のその述語に対する認識が関係してくるのである。上例における述語「安い」に関して言えば、(45d) (46) の「安い」は局面レベル述語と解され、主語 NP はそれぞれ「ガ」「ハ」を取ることが出来る。ここでの「ハ」は単に主題を表すだけで、解釈に寄与しない（つ

まり、「属性記述」を強制しない)。この点、Diesing (1992) が展開する英語の議論とは異なり、日本語の特徴を示すものと思われる。Diesing 流の局面レベル述語の統語構造は、日本語においては、単に「ハ」「ガ」を構造上の違いに対応させるのに有効であって、解釈の相違に関しては関係しないのかもしれない。このことについては、後で再び触れる。他方、(45c) の「安い」は個体レベル述語であり、「ハ」のみしかとらない。

さて、述語が局面レベル・個体レベルのどちらの述語になるかは、上で述べたような要因によって決定されるが、「～すぎる」については、「過剰」という概念の表出の仕方によって述語の性格が決定されるということを以下で論じる。

## 6. “過剰”の基準と述語の性格

4節までの議論で、「動詞+すぎる」が局面レベル述語であり、「形容詞・形容動詞+すぎる」が個体レベル述語であるというふうに果たして画然と分類できるのかという問題が残されていたが、ここではこの問題について考える。日本語の大部分の動詞は非状态的、つまり動作性 (dynamicity) を持つものであるが、これらの動詞が「すぎる」と接合すると、同じく動作性述語となる (久野 (1973))。このような場合、局面レベル述語・個体レベル述語の違いを持ち込むのはさほど有効なものではない。通常、動作性を持つ述語というのは、そのアスペクチュアルな側面に関心が払われるものであり、当然、かかる述語は局面レベル述語として分類される。本来、局面レベル述語・個体レベル述語の区別が、状态的な (stative) 述語に対して提案されたものであることから、本稿で問題になるのは「形容詞・形容動詞+すぎる」の方である。

確かに、一般的に局面レベル述語と個体レベル述語を区別する現象と見なされている例 ((26)―(33)) においては、「動詞+すぎる」「形容詞・形容動詞+すぎる」が、それぞれ局面レベル述語、個体レベル述語であるかのような結果が得られた。しかし、以下の例を見られたい。

- (49) a. 花子は太郎の部屋が／?を昨日に比べて静かすぎると思った  
 b. 花子は太郎の部屋が／を他の部屋に比べて静かすぎると思った  
 (50) a. 花子はあの喜劇役者が／?を昨日に比べて面白すぎると思った

b. 花子はこの喜劇役者が／を他の役者に比べて面白すぎると思った  
 このような例では、(a,b) の対応において、同じ述語が用いられているのにもかかわらず、結果が異なっている。(a) に対しての判断は、“?” が示しているようにかなり微妙ではあるが、(b) に照らし合わせて (a) を判断すると、やはり (b) に比べて容認性が低くなる。本稿では、この微妙ながらの差に注目する。

このような容認性の違いは、一言で言えば“過剰”の概念が何を基準に生じているのかということである。(b) の方は、“過剰”の基準が「～すぎる」の主語 NP 以外の他のモノにあり、(a) では、その基準が主語 NP という個体自身となっている。普通、「～すぎる」における“過剰”の基準は明示されず、その基準は共起する副詞的要素や発話の文脈などによって顕在化・醸成され得る。本稿では、この基準がある程度明らかになることで、述語「～すぎる」の性格が決定されると捉える。(49b) (50b) の「～すぎる」は、他のモノとの比較としての過剰性が表出しており、この意味で主語 NP に対する一種の「属性」を表すと捉えることが可能である。他方、(49a) (50a) の「～すぎる」は、時間的軸における主語 NP の過剰性（つまり、時間に沿って変化し得る概念である）が述べられている。つまり、このような違いは、述語が分類的特徴を表すかどうかという違いである。“分類的”というのは、普通、あるモノを他から分けるということ (identification) である。(51c) (52c) が不自然なのは、その述語が分類的特徴を表していないからである。

(51) a. 太郎の家はどんな家なんですか？

b. 太郎の家は他の家に比べて静かすぎる家です

c. ??太郎の家はいつもに比べて静かすぎる家です

(52) a. メル・ギブソンはどんな俳優ですか？

b. メル・ギブソンは他の役者に比べてかっこよすぎる俳優です

c. ??メル・ギブソンはデビュー時に比べてかっこよすぎる俳優です

由本 (1997) では、「～すぎる」の過剰性の基準は様々で、例えば「お金を使すぎた」のような場合にも、“つまらない品物に対して大金をかけすぎたのか” “(主語が子供の場合) 子供の割りにはたくさんのお金を使ったというのか” 等の様々な状況が想定される旨が述べられている。これは、本稿のように基準を大き

く二つに分けた考え方とは対照的だが、ここで、由本が基準と考える上記のような状況を明示した場合の以下の文を見てみよう。

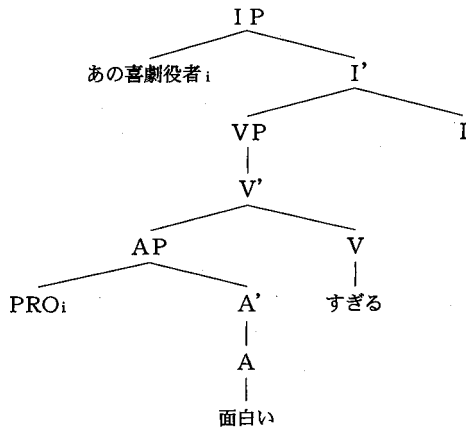
(53) 太郎は食費よりも遊興費にお金を使いすぎる

(54) 次郎は子供のくせにお金を使いすぎる

これらは全て、本稿で設定した二つの基準によって説明が可能である。(53)では、“お金を食費と遊興費に費やす割合について、太郎の場合は一般の人々よりも遊興費が多い”という意味で、他のモノが基準である。(54)は、“使うお金について、次郎の場合は一般的な子供が使う金額よりも多額である”という意味で、これもまた他のモノとの比較である。しかしながら、これはあくまでも、由本の主張するような様々な基準を、本稿での（「形容詞・形容動詞＋すぎる」に関して想定した）基準に当てはめることができるということである。本稿でも述べたように、基準が何なのかは発話の文脈等から様々に醸成され得るものであって、基準の多様さを否定することはできない。よって、過剰の基準にもいくつかの層があって、本稿で着目している基準は、最も外側の、換言すれば、比較的無標（unmarked）の発話下では最初に認知される基準だと言えるのかもしれない。

このように、「～すぎる」は、その“過剰”の基準によって、局面レベル述語として機能するか、あるいは個体レベル述語として機能するのかが明確になると本稿では分析される。そして、統語構造についても述語の性格に対応して別個の構造になる。(55)は、(29b)の「～すぎる」が個体レベル述語の場合の構造である。

(55)



(55) の INFL は、IP の指定部位置にある名詞句に「属性… (INFL が結合する VP が表す属性) を有する」という  $\theta$  役割を与える。空範疇 PRO は、形容詞「面白い」の語幹「面白 (omoshiro-)」から独自の  $\theta$  役割 (おそらくは、[Theme] であろう) を与えられる。Chomsky (1995) での枠組み (いわゆる「極小理論 (minimalist program)」) を背景にした酒井 (1996) では、「 $\theta$  基準」等のような「統率・束縛理論 (GB theory)」においては普遍原理とされていたものを独立した原理と見なさず、つまり、 $\theta$  位置から  $\theta$  位置への移動を認めている。よって、(55) のような構造でも PRO が置かれず、一番下の AP の指定部に直接名詞句が生成され、AP 内で  $\theta$  役割を付与された後、IP 指定部へと移動し、そこでも  $\theta$  役割を受けると考えられている。しかし、あくまで GB 理論を背景に分析を行うのなら、 $\theta$  役割付与能力を有する INFL のコントロール述語的特性を構造上に反映させた、(55) のような PRO を含んだ構造がやはり望ましいのではないかと考える。尚、(29b) の「 $\sim$ すぎる」が局面レベル述語として機能する場合には、(35) のような構造になる<sup>8)</sup>。Diesing (1992) の局面レベル述語の構造では、主語 NP が IP 指定部に移動すると「属性」解釈を受けると考えられたが、本稿における「 $\sim$ すぎる」の局面レベルの構造では、IP 指定部位置は単に「ハ」の位置であるというだけであり、属性の解釈とは結びつかない（「ハ」でマークされた主語が属性解釈を受ける場合の述語は全て個体レベル述語であり、必ず (55) の構造になると本稿では考えられる）。日本語の構造では、属性解釈を受けるか否かは、当該名詞句が VP 外部に位置するということはもちろんのこと、その位置が  $\theta$  位置かそうでないかが英語よりも深く関わっているものと考えられる。

## 7. おわりに

「 $\sim$ すぎる」に二つの構造を設定する利点としては、「 $\sim$ すぎる」に関する二つの解釈類型の違い (叙述機能の違い) に構造の違いを対応させることが可能となることが挙げられる。影山 (1993) 等の従来の研究では、そもそも二つの解釈類型なるものが認められておらず、「 $\sim$ すぎる」は全て同じ単一構造を選択するとされてきたが、このような分析では、「 $\sim$ すぎる」が見せるいくつかの統語的振る舞いの違いの要因をどこにも求めることが出来ないように思われる。



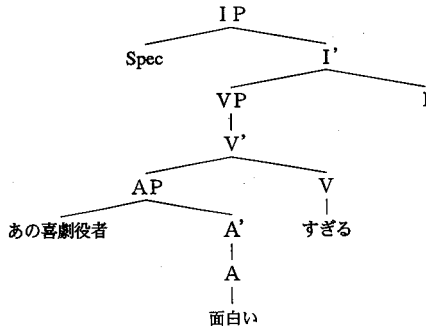
本稿において主張したことをまとめると次のようになる。

- I 「～すぎる」の解釈類型は二種類に分けられ、「動詞＋すぎる」は“過剰相”、「形容詞・形容動詞＋すぎる」は“強意相”という解釈類型に分類される。前者は“ある出来事・命題に対する叙述”であり、後者は“ある個体に対する叙述”である。
- II 「動詞＋すぎる」「形容詞・形容動詞＋すぎる」は、それぞれ局面レベル述語、個体レベル述語としての構造を有し、構造の相違はINFLの $\theta$ 役割付与能力の有無に還元される。
- III 個体レベル述語としての「～すぎる」は、“過剰”の基準によって局面レベル述語にもシフトし得る。

#### 注

- 1) まったく制限がないわけではない。特に、形容動詞との接合では、この範疇自体が確たる定義を持ち得ないために事情が複雑である。例えば、影山(1993)に従い、形容動詞を「形容名詞＋な／だ」と規定したところで「あいにくな」と「あいにくの」の相違の処理に迷うことになるであろうし、形容動詞だと考えた場合には「すぎる」との接合は不可能である。
  - (a) \*あの日の雨はあいにくすぎた  
よって、本稿では、形容動詞を“大変・とても・非常に”などで修飾され得る形容名詞と規定しておく。
  - さらに、「すぎる」と名詞との接合の可能性についても付言しておく必要がある。
  - (b) 彼は子供すぎる  
(b) のような場合では、「子供」は名詞ではなく、形容動詞と捉えるべきである(城田(1998:283))。
- 2) 「動作相」とは、いわゆる Aktionsart に対応する概念である。敢えて英語名称を求めるならば、subaspect くらいになるうか(城田俊氏の御教示による)。
- 3) 本論で述べるように、「食べすぎる」と「美しすぎる」では、叙述対象(叙述機能)が異なっているし、城田(1985)自身が「～すぎる」の特殊性として動詞以外との結合を挙げていることから、両者は何らかの形で区別されねばならないであろう。また、「美しすぎる」等を過剰相動詞の範疇に含めることも、述語の実質の機能を捉えていないのではなかろうか。

- 4) これは、城田 (1998) での“状態相”の定義に通ずるものであろう。
- 5) 安藤 (1986) は、“総記”の「ガ」にのみ強勢を置くことができるとしているが、強勢が置かれるからこそ“総記”の解釈が出てくるのではなからうか。
- 6) 「動詞+すぎる」にも“ある個体に対する叙述”機能を持つものがわずかながらある。
- (c) 太郎は数学がよく出来すぎる  
本来ならば、(c) のようなタイプは、本稿での“強意相”に含まれるべきであるが、現時点では「動詞+すぎる」の例外として扱っておく。
- 7) このような (英語における) INFL の  $\theta$  役割付与能力の有無に関しては、二種類の繫辞 (copula) の区別が想定されている。
- 8) 具体的に構造を表示すれば、以下ようになる。



#### 参考文献

- 安藤貞雄 (1985) 『統・英語教師の文法研究』大修館書店
- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 三宅知宏 (1995) 「日本語の屈折要素と句構造」『日本学報』14, 65-77. 大阪大学
- 酒井 弘 (1996) 「繰り上げ文の非対称性と派生の統一性」*Kansai Linguistic Society* 16, 1-11.
- 城田 俊 (1985) 「国語動詞の動作相」『国語國文』611号, 40-53.
- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法第7巻 形容詞』研究社出版
- 由本陽子 (1997) 「動詞から動詞を作る」『語形成と概念構造』研究社出版

- Arita, S. (1997) "On the Function of the Japanese Particle *wa*: New Light on Two Distinct Uses of the *te-wa* Construction," in H. Sohn & J. Haig (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 6, CSLI.
- Carlson, G. (1977) *Reference to Kinds in English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press.
- Diesing, M. (1992) *Indefinites*, MIT Press.
- Endo, Y. (1994) "Stage/Individual-level Nouns," *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 83-99.
- Uechi, A. (1996) "Toward Syntax-Information Mapping," in N. Akatsuka et al. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 5, CSLI.

#### 付記

本稿は、国語学会平成10年度秋季大会（於：九州大学）において口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。発表当日、多くの有益なコメントをして下さった先生方に心から感謝申し上げます。また、岩倉國浩先生からは貴重な御指摘を頂き、城田俊先生には本稿で扱った概念について御教示を賜った。記して感謝申し上げます。尚、言うまでもなく、本稿における不備等は全て筆者の責任である。

〈キーワード〉「～すぎる」、解釈類型、局面レベル述語、個体レベル述語、“過剰”の基準

## On Compound Verbs with *-sugiru*

Futoshi YAMAKAWA

The aim of this paper is to investigate the syntactic structure of compound verbs with *-sugiru*. It is argued that the structure of such verbs can be divided into two types.

I focus on the descriptive functions of these compound verbs, and argue that they should be distinguished by their functions. One type describes a proposition, the other describes an individual.

Assuming such a form-function distinction, I attempt to demonstrate that the first type is a stage-level predicate and the latter type is an individual-level predicate. Therefore, each type is derived from a distinct structure. I also attempt to show that the latter can shift to a stage-level predicate depending on the standards of 'excess.'